

推古天皇は聖徳大師を重用しなかった

2021 年 9 月 5 日

我部山 民樹

1. はじめに

推古天皇（すいこてんのう）は飛鳥時代の第 29 代欽明天皇（きんめいてんのう）の皇女で母親は堅塩媛（きたしひめ、蘇我稲目の娘）である。異母兄・敏達天皇（びたつてんのう）の妃となり、のちに皇后となる。敏達天皇崩御後、同母兄・用明天皇（ようめいてんのう）、異母弟・崇峻天皇（すしゅんてんのう）が皇位につくが、そのあとをうけ、593 年に推古天皇として即位する。

歴代天皇の中で最初の女性天皇であり、在位期間は 36 年、『古事記』では 37 年で、最も在位期間が長い女性天皇、最も長生きした女性天皇（享年 75 歳）である。

中国の則天武后が即位したのが 690 年、新羅の善徳女王が即位したのが 632 年であり、593 年に即位した推古天皇は東洋の女帝第 1 号である。

諱（いみな）は額田部皇女（ぬかたべのひめみこ）。和風諡号（わふうしごう）は豊御食炊屋姫尊（とよみけかしきやひめのみこ）と、『日本書紀』による。（『古事記』では豊御食炊屋 比売命という）。炊屋姫尊（かしきやひめのみこと）とも称される。漢風諡号の「推古天皇」は代々の天皇と共に淡海三船（おうみのみふね、奈良時代後期の貴族）によって名付けられたとされる。

容姿端麗であり、政治感覚に優れていたという。頭脳明晰で、摂政・皇太子の厩戸皇子（うまやどのおうじ、聖徳太子、甥で且つ娘婿）と大臣（おおおみ）・蘇我馬子（そがのうまこ）の均衡を保ち、豪族の反感を買わないように、巧みに王権の存続を図ったとされてきた。

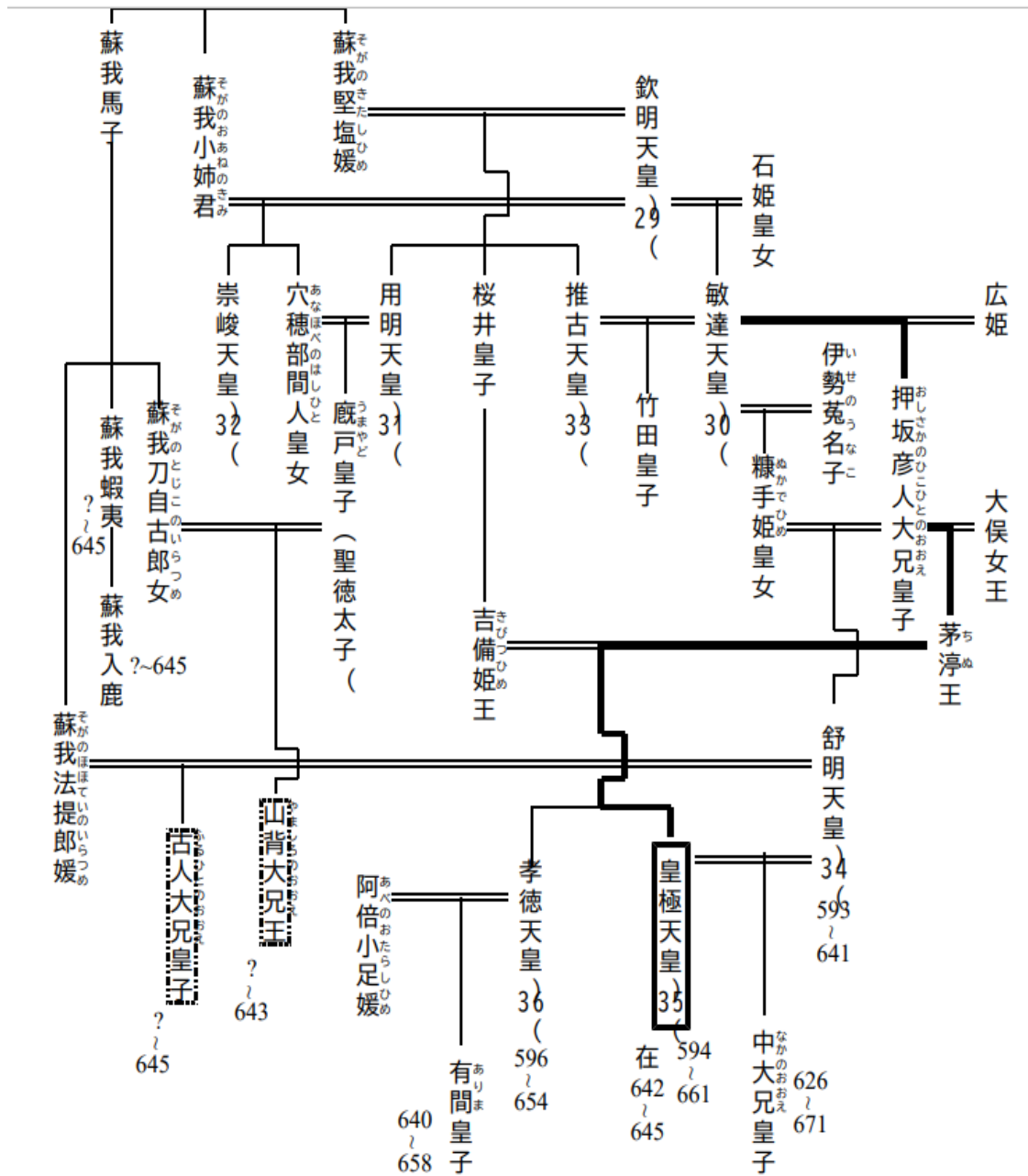
推古天皇陵

磯長山田陵（しながのやまだのみささぎ）・竹田皇子墓

（大阪府河内郡太子町）



2. 系図



このような同父異母兄妹婚のような近親婚は、富の分散を防ぐ有効な方法として、六、七世紀以降に王権中枢部から始まり、有力氏族の間でも繰り返し行われていた。

しかし、同母兄妹の恋愛は現在と同じで厳しく制裁をうけた。

3. 飛鳥時代（古墳時代末期を含む）の歴代天皇

代	天皇名の 漢風諡号 追号	読み	天皇名の 和風諡号 御称号（幼名） 別称	諱	画像	諡号・追号の別 諡号・追号の由来	在位期間 （1872年以前の日付は旧暦）
29	欽明天皇	きんめい	天国排開広庭天皇			諡号 淡海三船による一括撰 進	宣化天皇4年(539年?)12月5日 - 欽明天皇32年(571年?)4月15日
30	敏達天皇 (敏達天皇)	びだつ	淳中倉太珠敷天皇	他田		諡号 淡海三船による一括撰 進	敏達天皇元年(572年?)4月3日 - 同14年(585年?)8月15日
31	用明天皇	ようめい	橘豊日天皇	池辺		諡号 淡海三船による一括撰 進	敏達天皇14年(585年?)9月5日 - 用明天皇2年(587年?)4月9日
32	崇峻天皇	すしゅん	泊瀬部天皇	泊瀬部		諡号 淡海三船による一括撰 進	用明天皇2年(587年?)8月2日 - 崇峻天皇5年(592年)11月3日
33	推古天皇	すいこ	豊御食炊屋姫天皇	額田部		諡号 淡海三船による一括撰 進	崇峻天皇5年(592年)12月8日 - 推古天皇36年(628年)3月7日
34	舒明天皇	じょめい	息長足日広額天皇	田村		諡号 淡海三船による一括撰 進	舒明天皇元年(629年)1月4日 - 舒明天皇13年(641年)10月9日
35	皇極天皇	こうぎょく (くわうぎょく)	天豊財重日足姬天皇	主		諡号 淡海三船による一括撰 進	皇極天皇元年(642年)1月15日 - 同4年(645年)6月14日

4. 年表

弥生・古墳		飛鳥		奈良			
二二九	卑弥呼が魏に使いを送る	六〇三	聖徳太子、摂政となる	七五二	東大寺大仏開眼供養	八九四	遣唐使派遣停止
六〇四	冠位十二階制定	六四二	大化の改新	七五三	鑑真が来日する	一〇〇頃	「枕草子」「源氏物語」なる
六〇八	十七条憲法制定	七〇一	壬申の乱	七八八	最澄が比叡山延暦寺を創建する		
六四五	小野妹子らを再び隋に派遣する（遣隋使）	七四三	大宝律令なる	七九四	平安京遷都		
六七二	大化の改新	七〇一	平城京遷都	八一六	空海が高野山の地を賜る（金剛峰寺の由来）		
七〇一	大化の改新	七四三	大仏建立の詔	八九四	遣唐使派遣停止		
七四三	大化の改新	七五二	東大寺大仏開眼供養	一〇〇頃	「枕草子」「源氏物語」なる		
七五二	東大寺大仏開眼供養	七八八	最澄が比叡山延暦寺を創建する				
七八八	最澄が比叡山延暦寺を創建する	七九四	平安京遷都				
七九四	平安京遷都	八一六	空海が高野山の地を賜る（金剛峰寺の由来）				
八一六	空海が高野山の地を賜る（金剛峰寺の由来）	八九四	遣唐使派遣停止				
八九四	遣唐使派遣停止	一〇〇頃	「枕草子」「源氏物語」なる				
一〇〇頃	「枕草子」「源氏物語」なる						

年度	主な出来事
538 年	大陸（朝鮮半島）から仏教伝来
575 年	皇女ではない非蘇我系の広姫（ひろひめ）が、敏達天皇の皇后となる
576 年	広姫が死没し、蘇我系の額田部皇女が敏達天皇の皇后となる
585 年	非蘇我系の敏達天皇が仏教追放の詔を出す 廃仏派の物部守屋（もののべのもりや）が、蘇我氏の造った仏殿を焼き払い、仏像を難波の堀江に棄てる。
586 年	敏達天皇、病にて崩御し、蘇我系で崇仏派の用明天皇（額田部皇女の同母兄）が即位する
587 年	・用明天皇が崩御し、額田部皇女の詔により崇峻天皇（額田部皇后の異母弟）が即位する。額田部皇女は皇太后となる。 ・崇仏派の蘇我馬子と廃仏派の物部守屋が争い、守屋は射殺される
592 年	・蘇我系の崇峻天皇が馬子に暗殺される
593 年	額田部皇女が即位し、推古天皇（39 歳）となる ・蘇我馬子、大臣（おおおみ）となる ・推古天皇の甥で娘婿の厩戸皇子（聖徳太子、用明天皇の皇子）、摂政となる
594 年	推古天皇、「三宝（仏・法・僧）を敬うべし」という詔を出す
596 年	蘇我大臣、飛鳥に蘇我氏の氏寺、法興寺を建立。（のちの飛鳥寺）
600 年	倭王姓「阿每字多利思北孤」（アメノタリシヒコ）が第 1 回遣隋使を派遣（隋書による）
601 年	厩戸皇子、斑鳩宮（いかるがのみや）の造営を開始
603 年	・冠位十二階を制定 ・推古天皇、（飛鳥の）豊浦宮（とゆらのみや）から小墾田宮（おはりだのみや）に移る

604 年	厩戸皇子、憲法十七条を制定
605 年	厩戸皇子、飛鳥より斑鳩に移り住む
607 年	・厩戸皇子、法隆寺建立 ・小野妹子を第 2 回遣随使として隋に派遣（隋書、日本書紀による）
608 年	小野妹子を第 3 回遣隋使として派遣（隋書、日本書紀による）
610 年	第 4 回遣隋使を派遣（隋書による）
614 年	第 5 回遣隋使を派遣（日本書紀による）
620 年	厩戸皇子、馬子とともに国史を編修
622 年	厩戸皇子死没（享年 49 歳）
628 年	推古天皇崩御

5. 検討条件の整理

推古天皇の謎を解くには、甥の厩戸皇子（聖徳太子）の謎、蘇我馬子の謎、日本書紀の謎を解き明さなければならない。

古事記と日本書紀は、637 年に皇位についた天武天皇の勅による編纂事業である。720 年に完成した日本書紀はライバルである有力豪族に対し、神代から続く天皇家の血筋の優秀性と日本国の統治者であるという正統性を再認識させようとしたもので、天皇家の都合のよいように改編されていると歴史家に指摘されているので、書かれていることをそのまま鵜呑みにはできないことを前提とする。

○厩戸皇子と蘇我馬子に関して

聖徳太子磯長墓（大阪府河内郡太子町）



石舞台（蘇我馬子の墓とされる）



石舞台はほぼ正方形の2つの濠(ほり)で囲まれていたことが分かった。内濠は一辺が約50メートル、外濠は一辺が約80メートル。濠や玄室(石舞台)の大きさからして、**天皇陵に匹敵するスケール**、といえるだろう。時の最高権力者を彷彿させる墓だ。埋葬品がないため、決定的な証拠はないが、蘇我馬子の墓とされる。

日本書紀によれば、推古天皇が「厩戸皇子に悉（ことごと）く万機を委ね、摂行させた」とあるが、これは日本書紀の編纂を指示した天武天皇等が改編したものであり、これを根拠に後世の歴史家が推古朝の政治のほとんどを厩戸皇子が行ったとし、種々の逸話が創作され、伝説となったとの説がある。その説に従えば、厩戸皇子の政治への関与の度合いは見直さなければならないようだ。

以下の戦後の歴史家の資料に厩戸皇子の実像と記紀との差異が示唆されていると思われる。

- ・厩戸王が死去して50年後、凄惨な皇位継承権争い（壬申の乱）が起こる。天皇の権威は失墜し、勝者となった天武天皇（631～686年）は「天皇中心の中央集権律令国家づくり」をすすめていく。そのとき天武天皇は「厩戸王」というひとりの有能な人物に着目したのだろう。彼と同時代に行われた数々の施策を誇大評価し、これらの偉業すべての部分で関与したとする「聖徳太子」をつくり上げたのだろうと推測する。ライバルである有力豪族に対し、神代から続く自らの血筋の優秀性と日本国の統治者であるという正統性を再認識させようとしたのでは、と考えられる。

こうしたことを背景にして戦前につくり上げられた「聖徳太子」像は、いま大きく揺らいでいる。

- ・凄惨な皇位継承権争い「壬申の乱」が起き、天皇の権威は失墜した。勝者の天武天皇が天皇中心の中央集権国家づくりをすすめた。日本書紀により、ライバルである有力豪族に対し、神代から続く自らの血筋の優秀性と日本国の統治者であるという正統性を再認識させようとし、そのために厩戸皇子に着目した。同時代に行われた数々の施策を誇大評価し、これらの偉業すべての部分で厩戸皇子が関与したとする聖徳太子像が作り上げられたと考えられているようだ。こうしたことを背景にした戦前の「聖徳太子像」は大きく揺らぎ、教科書も厩戸皇子「聖徳太子」としている。

・藤原氏が栄達する契機となった乙巳の変で蘇我氏を滅ぼした正当性を高める目的で、記紀に登場する蘇我氏は皇室乗っ取りを目論む横暴な豪族として悪事ばかりが強調されているのではないか。

・馬子の人物については『古事記』『日本書紀』の記述に負うところが大きい
が、いずれも後年藤原氏が権力を握ってから編纂されたもので、藤原氏が栄達する契機となった乙巳の変で蘇我氏を滅ぼした正当性を高める目的で、記紀に登場する蘇我氏は皇室乗っ取りを目論む横暴な豪族として悪事ばかりが強調されているのではないかという説がある。

・推古帝の時代に冠位十二階制度や十七条憲法の創設、遣随使派遣といった政治外交における大きな事績を無視するわけにいかず、これらを中心となって主導した馬子の功績を皇族である厩戸皇子(聖徳太子)が行ったものと記し、蘇我馬子を聖徳太子の政敵に位置づけたとする説がある。

これらの引用資料を考慮に入れて憶測してみる

用明天皇の皇子・厩戸皇子は額田部皇女の甥で娘婿であり、有能で年齢的にも皇位につくのに申し分なかったが、593年に皇后の額田部皇女が推古天皇として即位した。そして厩戸皇子は皇太子となった。

額田部皇女は実子・竹田皇子が幼な過ぎたので、中継ぎとして即位したという説があるが、竹田皇子は既に死没していたので、中継ぎではなく自ら女帝になることを望んで皇位についたのだろう。中継ぎの為にやむを得ず即位したという話は何時頃からか分からないが、厩戸皇子を即位させずに額田部皇女が皇位についたことへの言い訳であり辻褄合わせと解釈できる。

竹田皇子は、587年に蘇我氏と物部氏の争いで、守屋に襲われ死没したというのが本当のようだ。その後の史料に天皇候補の竹田皇子の名前が出て来なくなった事がそれを如実に示している。

厩戸皇子は皇太子になって間もない時期に、早々と斑鳩の地を与えられ、601年には斑鳩宮（いかるがのみや）の造営を開始し、605年には移り住んでいる。まるで隠遁生活に入ったかのようなのである。地図で見ると、斑鳩は飛鳥の小墾田宮（おはりだのみや）からは遠く離れている。天皇、蘇我馬子や官人たちと日常的に会うことは出来ない距離であり、政務を執ることは不可能で、ほとんどの政務に関与していなかったことは疑う余地がない。斑鳩に移る以前も政務への関与は限定的だったのだろう。

有能な皇子であり、特命案件の立案、関与はあったのだろう。



←斑鳩宮

←小墾田宮



←小墾田宮跡

これらの地図によると斑鳩は飛鳥の小墾田宮から直線距離でもおよそ 14 キロメートル離れている。当時の道路が分からないが、歩行距離はおよそ 20 キロメートル？

推古天皇が早い時期から厩戸皇子を飛鳥から斑鳩に追いやったように見えてくるが、有能な皇太子・厩戸皇子を特命的な案件に関して活用したものと思われる。厩戸皇子の功績とされた事績のうちの多くは蘇我馬子によるものだろう。

○推古天皇に関して

記紀（古事記、日本書紀）によれば、推古天皇は穴穂部皇子の誅殺命令を出したことや、崇峻天皇即位の詔を出しているが、その他の事績については明らかではない。

推古天皇は有能な叔父・蘇我馬子（飛鳥に住む）と二人三脚で、政務を執っていたのだろう。厩戸皇子が政権の中枢にいなかったとするならば、馬子の独裁政治の感もするが、推古天皇は決して馬子の傀儡では無かったし、馬子に任せっぱなしにしていたわけでは無く、要所は抑えながら馬子を大いに活用したものと思われる。

しかし、ライバルに対しての暗い闇が見え隠れする。

571 年、額田部皇女（推古天皇）が敏達天皇と結婚するが、その後に血なまぐさい事件が多く発生し、皇族等が死没している。史料には死没の理由は書かれていないことがあり、書かれていても事実かどうか分からない。額田部皇女が明らかに関与している事例もあるが、それ以外にも額田部皇女や蘇我氏にとって都合のよいタイミングにライバル達が死没している事例が見られる。偶然もあろうが、その内の何件かには推古天皇や蘇我馬子の何らかの関与があったと疑われても仕方が無いだろう。

○日本書紀に関して

推古朝の施策について、その成果を誇大に表現しているとの説もあるようだが、初めて暦日を用い、冠位を制定して憲法を定め、外交政策も一定の成果をあげているので、日本史上において画期的な時代だったと言える。それらを見無視できないので、日本書紀や古事記に記すことにしたが、中大兄皇子、大海人皇子と藤原鎌足が滅ぼした蘇我氏の祖先・馬子の事績は出来るだけ矮小化し、ほとんどを天皇家の事績とした。ほとんどを女帝の事績にしてしまうのは不自然であり、馬子主導の施策になってしまう懸念がある。そこで事績に関しては推古天皇を目立たせないようにした。あるいは男性社会の政権において女性天

皇一人だけで、歴代の男性天皇を凌ぐ偉業を成し遂げたとするには天武天皇等には抵抗があったのかもしれない。その他の理由もあったと思われる。

そこで記紀には、天皇として申し分のなかった厩戸皇子に「万機を悉く委ねて、摂行させた」ことにして、ほとんどを厩戸皇子の事績に改編したと憶測できる。

調べてみる。

6. 推古天皇にかかわる経緯

年度	概 要
554 年 5 月 21 日	額田部皇女 （ぬかたべのひめみこ）または 炊屋姫 （かしきやひめ）誕生。 父親；第 29 代 欽明天皇 （きんめいてんのう、第 26 代 継体天皇 の皇子） 母親； 蘇我堅塩媛 （そがのきたしひめ、 蘇我稲目の娘 ） 「日本書紀」によると、『炊屋姫（かしきやひめ）は「姿色（みかお）端麗（きらきら）しく」、挙措動作（立居振舞）は乱れないとある。また、頭脳明晰で政治感覚に優れていた』とされてきた。
571 年	額田部皇女 が 淳中倉太珠敷尊 （ぬなくらのふとたましきのみこと、後の第 30 代 敏達天皇 （びたつてんのう）、 欽明天皇 の皇子、異母兄）の妃となる。 菟道貝蛸皇女 （うじのかいたこのひめみこ、 聖徳太子妃 ）、 竹田皇子 （たけだのみこ）、 小墾田皇女 （おはりだのひめみこ、 押坂彦人大兄皇子 の妃）、 尾張皇子 （おわりのみこ、 聖徳太子 の妃・ 橘大郎女 （たちばなのおおいらつめ）の父）、 田眼皇女 （ためのひめみこ、 田村皇子 （後の 舒明天皇 ）の妃）、 桜井弓張皇女 （さくらのゆみはりのひめみこ、 押坂彦人大兄皇子 の妃及び 来目皇子 （くめのみこ）の妃）、 鵜鷺守皇女 （うもりのみこ、 舒明天皇 の妃）の 2 男 5 女を儲けた。
572 年	敏達天皇即位
575 年	広姫 （（ 息長真手 （おきながのまての）王の娘）が 皇后 （注. 1）となる。 押坂彦人大兄皇子 （おしさかひとおおえのおうじ）（注. 2）、 逆登皇女 、 菟道磯津貝皇女 の 1 男 2 女を産んだとされる。 皇女の 額田部皇女 が皇后にならず、そうではない 広姫 が皇后になった理由は不明。
576 年	皇后・広姫の死去に伴い、額田部皇女が皇后となる。 （あわただしい交代劇である。）
585 年 9 月 14 日	・ 敏達天皇、仏法追放の詔を出す。

	敏達天皇は廃仏派寄りであり、廃仏派の大連・物部守屋（おおむらじ・もののべのもりや、大和朝廷の最高の官職）と中臣氏が勢いづき、それに崇仏派の蘇我馬子（注. 3）が対立するという構図になっていた。蘇我馬子が寺を建て、仏を祭るとちょうど疫病が発生したため、物部守屋が天皇に働きかけ、仏教禁止令を出させ、物部守屋が詔に従い蘇我氏の造った仏殿を焼き、仏像を投げ棄てた。 その年の 9 月 14 日、天皇は病が重くなり崩御。仏教を巡る対立は持ち越された。
586 年	敏達天皇の殯宮（もがりのみや、遺体を安置し、様々の儀式をおこなう）に異母弟の穴穂部皇子（あなほべのみこ、欽明天皇の皇子）が侵入し、天皇の地位を狙って皇后を犯そうとした。寵臣・三輪逆（みわのさかう）に助けられるが、のちに逆（さかう）は穴穂部皇子に同調した物部守屋（もののべのもりや）に追い詰められ殺された。（注.4）
586 年	第 31 代用明天皇即位（額田部皇女の同母兄）
587 年	・病を得た用明天皇が仏教信仰の是非を問うた『朕（ちん）、三宝に帰らむと思ふ。卿等議れ（いましたちはかれ）』ことから崇仏派と廃仏派の間で極度に緊張が高まり、そのなかで用明天皇は病にて崩御した。（暗殺説もある。） ・丁未の乱（ていびのらん） 次期天皇として穴穂部皇子を建てようとする物部守屋と泊瀬部皇子（はつせべのみこ、穴穂部皇子の同母弟）を支持する蘇我馬子が戦うことになった。 6 月 7 日、馬子等が額田部皇女(炊屋姫)の詔を得て、穴穂部皇子の宮を包囲して穴穂部皇子を誅殺した。翌日、穴穂部皇子と親しかった宅部皇子(やかべのみこ)を誅殺した。守屋は馬子等に射殺された。（注.5） この合戦で額田部皇女の実子・竹田皇子が守屋軍の奇襲攻撃で死没したといわれている。合戦ののち、竹田皇子の名前が史料に登場しなくなる。 ・敏達天皇の第一皇子・押坂彦人大兄皇子が参戦せず。 ・第 32 代崇峻天皇の即位。 額田部皇女が詔を下して異母弟の泊瀬部皇子に即位を命じた。 ・額田部皇女は皇太后となる。
592 年 12 月 12 日	・馬子が大連（おおおみ、天皇の補佐として執政）になる ・「崇峻天皇暗殺事件」（注. 6）崇峻天皇が馬子の指図で暗殺される。暗殺された唯一の天皇である。 ・額田部皇女が馬子に請われ、豊浦宮にて即位し、第 33 代推古天皇（39 歳）となる。一説には実子の竹田皇子の中継ぎとして即位するが、間もなく竹田皇子は薨去したとの説がある。（587 年に死没したのが本当だろう）

593 年 5 月 15 日	・竹田皇子死没により、止む無く推古天皇が甥で娘婿の厩戸皇子(うまやどのおうじ、聖徳太子、20 歳) (注. 7) を皇太子・摂政とし、万機(よろずのまつりごと)を悉く委ね、摂行させたとされる。聖徳太子の父は用明天皇(推古天皇の同母兄)、母は推古天皇の異母妹・穴穂部間人皇女(あなほべのはしひとのひめみこ、生母同士(堅塩媛と小姉君)が実の姉妹関係)の間柄であり、これが竹田皇子亡き後において、天皇が厩戸皇子を起用する背景になったとの説がある。 ・押坂彦人大兄皇子に第 1 皇子・田村皇子が誕生。その後第 2 皇子・茅渟王(ちぬのみこ)も生まれた。その頃より押坂彦人大兄皇子が歴史上、登場しなくなる。(死没したのだろう。馬子に暗殺されたという説もある。)
594 年	推古天皇、「三宝(仏・法・僧)を敬うべし」という詔を出す
596 年	馬子、蘇我氏の氏寺・法興寺(のちの飛鳥寺)を建立。
597 年	吉士磐金(きしのいわかね)を新羅へ派遣する。
600 年	・推古天皇、第一次新羅征討軍を派遣。交戦の末、調(租税の一つ)を貢ぐことを約束させる。 ・第 1 回の遣隋使(日本書紀には見えない)(注. 8)が派遣された。この時、遣いの者は「倭王姓阿每字多利思北孤」と言ったと『隋書』『東夷倭国伝』に記されている。日本は女帝推古天皇の世であったのに「アメタリシヒコ」と男王の名になっている。(北は比の間違いと言われているが、間違いではなく「アメノタリシホコ」とする説もある)
601 年	厩戸皇子(聖徳太子)が斑鳩宮(いかるがのみや)の造営を開始。
602 年	推古天皇、第二次新羅征討軍を派遣
603 年	・(主語が無い)冠位十二階を制定(注. 9) ・推古天皇、小墾田宮(おはりだのみや)を造営しここに居を移す
604 年	皇太子、親(みづか)ら肇(はじめ)て十七条憲法を作りたまふ。(注. 10)
605 年	厩戸皇子、斑鳩宮に移り住む。(飛鳥の小墾田宮から直線距離でおよそ 14 キロメートル離れている)
607 年	・(主語が書かれていない)第 2 回遣隋使として小野妹子を隋に派遣(日本書紀、隋書) ・法隆寺創建
608 年	(主語が書かれていない)第 3 回遣隋使として小野妹子を隋に派遣(日本書紀、隋書)

610 年	(主語がかかれていない) 第 4 回遣隋使 (隋書による、記紀には無い)
614 年	(主語がかかれていない) 第 5 回遣隋使 (日本書紀)
620 年	聖徳太子と馬子が『天皇記』、『国記』を編纂し、献上する。 (現存していない、焼失したと言われている)
622 年 4 月	聖徳太子薨去。(49 歳)
624 年	馬子が倭の六県の一つである葛城県(馬子の本居(ウブスナ)とされる)の支配権を望んだ時、この要求を拒絶したと言われている。 「あなたは私の叔父ではあるが、だからといって、公の土地を私人に譲ってしまつては、後世から愚かな女と評され、貴方も不忠だと謗られよう」と。
626 年 6 月	蘇我馬子死没
628 年	推古天皇崩御。(75 歳) 田村皇子 (たむらのおうじ、敏達天皇の孫、押坂彦人大兄皇子の皇子) と山背大兄王 (やましろうおおえのおう、用明天皇の孫、厩戸皇子の皇子) が後継候補だったが、後継者の指名は避けたようだ。両皇子に行動を自重するように遺言したといわれる。(これが皇位継承をめぐる紛糾の要因となる)
629 年	田村皇子 (じょめいてんのう、押坂彦人大兄皇子の皇子、敏達天皇の孫) が即位して第 34 代舒明天皇となる。
641 年	舒明天皇崩御
642 年	第 35 代皇極天皇が即位。(宝皇女、舒明天皇の皇后、敏達天皇の皇子である押坂彦人大兄王子の皇子・茅渟王 (ちぬのおおきみ) の第一王女。母は吉備姫王 (きびひめのおおきみ)) 宝皇女 (たからのおうじょ)、初めは高向王 (たかむくおう、用明天皇の孫) と結婚して、漢皇子 (あやのみこ) を産んだ。後に舒明天皇と結婚し、630 年 3 月 1 日、37 歳で舒明天皇の皇后に立てられる。舒明天皇との間に、中大兄皇子 (のちの天智天皇)、間人皇女 (孝徳天皇の皇后)、大海人皇子 (のちの天武天皇) を儲けた。
643 年	蘇我入鹿が山背大兄王を襲撃し、山背大兄王は斑鳩寺にて一族もろとも首をくくって自害した。入鹿は従兄弟の古人大兄皇子 (ふるひとのおおえのみこ、中大兄皇子の異母兄) の擁立を企て、山背大兄王を襲撃したとされる。 山背大兄王の襲撃には、軽王 (かるのみこ、皇極天皇の弟) など、多数の皇族が加わっていたと言われており、山背大兄王を疎んじていた蘇我入鹿と、皇位継承における優位を画策する諸皇族の思惑が一致したからこそ発生した事件ともいわれている。

645 年	「乙巳の変」勃発。蘇我入鹿が中大兄皇子（舒明天皇と皇極天皇の皇子）と中臣鎌足に殺される。 皇極天皇が譲位し、第 36 代孝徳天皇即位（軽皇子、敏達天皇の孫、茅渟王の長男）。最初に古人大兄皇子が即位を要請されたが、身の危険を感じて辞退するが、後に中大兄皇子に謀反の疑いをかけられ、殺害される。
-------	---

注記 1. 天皇の後宮に入った女性のランク

皇后や妃になれるのは皇族のみである。

- ・后（こうごう/おおきさき）
- ・妃（ひ/きさき） - 2 名以内、四品以上の内親王
- ・夫人（ぶにん/おおとし） - 3 名以内、三位以上（公卿）の娘
- ・嬪（ひん/みめ） - 4 名以内、五位以上（貴族または豪族）の娘

注記 2. 押坂彦人大兄皇子

・蘇我氏の血を引かない敏達王統の最有力者であって、忍坂部（刑部氏）・丸子部などの独立した財政基盤を有し、王都を離れて水派宮（みまたのみや、奈良県河合町か）を営んでいた。用明天皇の崩御（587 年）後に王位継承者として候補に挙げたとされるが、対立する蘇我系王族が台頭したため、以後の史料には活動が一切見えず、蘇我氏によって暗殺されたとの憶測もある。ただし、『一代要期』や『紹運録』を基に逆算される舒明天皇（田村皇子、押坂彦人大兄皇子の第一皇子）の生年（593 年）とその弟・茅渟王（生没年不詳）の存在を考えると、592 年の推古天皇即位後も暫く生存していたはずで、非蘇我系の王位継承候補者として、蘇我系の竹田皇子や厩戸皇子と比肩し得る地位を保っていたと思われる。607 年に王位継承者（厩戸）を資養する壬生部（みぶべ、いわゆる名代・子代の一種で、皇位継承する皇子の養育料を負担したとされる。）が設置されているので、これ以前には亡くなっていたらしい。

・587 年、物部守屋と蘇我馬子の戦いにおいて蘇我馬子の側に味方した皇族や重臣たちの名前が『日本書紀』の記述の中には出てくるがその中に押坂彦人大兄皇子の名がないのである。そしてこれ以降、押坂彦人大兄皇子の名は歴史に全く登場しなくなる。病死したか、あるいは蘇我馬子に暗殺されたのではないかという説もあるが、もちろんそのような記録は一切ない。

- ・今日の天皇家は押坂彦人大兄皇子の子孫である。

（引用）

注記. 3 蘇我馬子（朝日新聞歴史人物事典他より）

蘇我氏は新興の大豪族で、どんどん頭角を現し、蘇我稲目の娘・堅塩媛を欽明天皇の妃にしたのを手はじめに、以後、歴代天皇と娘を結婚させた。馬子は稲目の子で、敏達・用明・崇峻・推古朝の大臣（おおおみ）。馬古, 汗麻古, 有明子とも書く。蝦夷, 善徳, 河上娘, 刀自古郎女, 法提郎女らの父。572年, 天皇即位に伴い大臣に任命され, 同 3 年には白猪屯倉(岡山県落合町)の戸籍整備に努力した。用明朝には物部守屋が穴穂部皇子を擁立しようとするのに対抗して, 豊御食炊屋姫(のちの推古天皇)を奉じ, 穴穂部皇子を殺させた。さらに, 用明天皇の没後には物部氏と戦い, 河内国の渋川の家(八尾市)で守屋ら物部一族を滅ぼし, 崇峻天皇をたてて独裁的な権力を握った。592 年には天皇が馬子を嫌っているのを知り, 東漢直駒に命じて暗殺させた。その後, 豊御食炊屋姫を擁立し推古天皇として即位させ, 自身は引き続き大臣となり, 「天皇記」「国記」の編纂を議するなど, 厩戸皇子(聖徳太子)と共に共同執政を行った。この間, 娘の刀自古郎女を厩戸皇子の, 法提郎女を田村皇子(のちの舒明天皇)のそれぞれ妃とし, 王族との血縁関係を強化した。

日本書紀には「性（ひととなり）、武略（たけきたばかり）有りて、亦弁才（わきわきしこと）有り。以て三宝を恭（つつ）しみ敬（うまや）いて、飛鳥河（あすかがわ）の傍（ほとり）に家せり。乃ち庭の中に池を開（は）れり。よりて小なる嶋を池の中に興（つ）く。故、時の人、嶋大臣（しまのおおきみ）という。」とある。

馬子の葬られた桃原墓は、奈良県明日香村島之庄の石舞台古墳だとする説が有力である。また、同古墳の西数百メートルの位置にある島庄遺跡について、邸宅の一部だったとする説がある。天皇陵に匹敵し、最高権力者を彷彿とさせる。

注記 4 三輪君逆の殺害

- ・穴穂部皇子、陰（ひそかに）に天下に王たらむ事を謀りて、口に詐りて逆君（さかうのきみ）を殺さむということをして在（たも）てり…。略。
- ・炊屋姫皇后と馬子は穴穂部皇子を発恨（うら）む。

注記 5. 物部守屋の討伐軍

日本書紀に「泊瀬部皇子（はつせべのみこ）、竹田皇子（たけだのみこ）、厩戸皇子（うまやどのみこ）、難波皇子（なにわのみこ）、春日皇子（かすがのみこ）、蘇我馬子大臣、紀男麻呂（きのをまろ）、巨勢臣比良夫（こせのおみひらぶ）、膳臣賀陀夫（かしはでのおみかたぶ）、葛城臣烏那羅（かつらぎのおみをなら）」の名前があるが、押坂彦人大兄皇子の名前はない。

注記 6. 崇峻天皇暗殺事件

- ・物部氏の没落によって欽明天皇以来の崇仏論争に決着が付き、法興寺（飛鳥寺）の造寺事業が行われた。しかし、即位したあとでも政治の実権は常に馬子が握っており、次第に不満を感じるようになった。

・592年10月4日に、猪を献上するものがあつた。天皇は筭刀（こうがい）を抜いてその猪の目を刺し、「いつかこの猪の首を切るように、自分が憎いと思っている者を斬りたいものだ。」と発言。そのことを聞きつけた馬子が「天皇は自分を嫌っている」と警戒し、部下に暗殺命令を下した。そして東国の調（ちょう、租税の一つ）を進めると偽って天皇を儀式に隣席させ、その席で東漢直駒（やまとのあやのあたひこま）に暗殺させた。天皇が殺害されたのは、確定している例では唯一である。死亡した当日に葬ったことと、陵地・陵戸がないことは、他に例がなく、天皇としての扱いを受けていないという説がある。

・近年、歴史家の佐藤長門氏は「王殺し」という異常事態であるにも関わらず、天皇暗殺後に各段の動揺が発生していないことを重視して、馬子個人の策動ではなく、多数の皇族・群臣の同意を得た上での「宮中クーデター」であった可能性を指摘している。

・その後、駒は馬子の娘である河上娘（かわかみのいらつめ、崇峻天皇の嬪（ひん/みめ））を奪って自らの妻とするが、河上娘を穢されたことを知った馬子に殺害された。（実際は崇峻天皇暗殺の口封じともされている）

注記7. 厩戸皇子「聖徳太子」（日本大百科全書より）

・飛鳥時代の皇族・政治家。用明天皇の第二皇子、母は欽明天皇の皇女・穴穂部間人皇女。「聖徳太子」は後世の尊称ないし諡号。また、厩戸皇子（うまやどのみこ、うまやどのおうじ）、厩戸王（うまやとおう）という名が本名とされることも多いが、同時代の文献によるものではない。

・日本書紀には「天皇が厩戸皇子を皇太子・摂政とし、万機を以て悉くに委ねる。」とある。そして、「生まれながらに能く言う。十人の訴えを聞いたまえて失ちたま外して能く弁（わきた）へたまふ。…以下省略」と極めて有能と記している。

・推古天皇のもと、蘇我馬子と協調して政治を行い、国際的緊張のなかで遣随使を派遣するなど大陸の進んだ文化や制度を取りいれて、冠位十二階や十七条憲法を定めるなど天皇を中心とした中央集権国家体制の確立を図った他、仏教を厚く信仰し興隆につとめたと従来されてきた。

・しかし、近年の研究では、聖徳太子の功績とされる膨大な事柄すべてを、たったひとりで行なったという説は否定されており、「聖徳太子」の称号に値する「すべてをひとりで成し遂げた」人物ではなかったという見方がされている。そのため、歴史の教科書には死去して50年後に贈られた聖徳太子という「称号」ではなく、「厩戸王[聖徳太子]」（うまやとおう）とカッコ書きで記されるようになる。

・厩戸王の正式な名前は厩戸豊聡耳皇子（うまやとのとよとみみのみこ）。厩戸王という有能な皇子がいて、推古天皇を補佐していたことは間違いないとされているようだ。

注記 8. 遣随使

遣隋使とは、推古朝の時代、倭国が技術や制度を学ぶために隋に派遣した朝貢使のことをいう。

年 度		概 要
600 年	第 1 回遣隋使	この頃まだ倭国は、外交儀礼に疎く、国書も持たず遣使した。（『隋書』倭国伝による、日本書紀に記載はない） 使いの者が「王の名は姓がアメ、字がタシリヒコ（倭王姓阿每字多利思北孤）、妻の名はケミ、後宮に 6, 7 百人の女性がいる。」と。使者の名前は不明。 瀬踏みの為の事前訪問か？
607 年 ～608 年	第 2 回遣隋使	（史料には無いが、数回の瀬踏みののちに、と遣わされたようだ） 小野妹子（おののいもこ）らを遣わす。「日出処の天子、日没するところの天子……」の国書を持参した。朝貢外交ではなく、対等外交を求めたが、中華思想では天子は一人なので、隋帝が激怒した。が、高句麗と戦争をする計画だったので、国書を見せず、裴世清（はいせいせい）らの使者を派遣する。小野妹子は使者とともに住吉津（すみのえのつ）に着き、帰国する。使者のために難波の高麗の館のほかに新しい館を造る。（『日本書紀』、『隋書』倭国伝） 政権の外交政策は成功する。 袁世凱は帰国後、倭王に会ったと報告しているが、女帝とは語っていない。（第 1 回遣隋使の時から王は男性とされていて、その王タシリヒコに会ったとされているので改めて王の名を書かなかった。中国にでも前代未聞の女帝だったら大変な驚きであり、書き残すはず）
608 年 ～609 年	第 3 回遣隋使	小野妹子・吉士雄成（きしのおなり）など隋に遣わされる。この時、学生として倭漢直福因（やまとのあやのあたふくいん）・奈羅訖

		語・恵明（ならのおさ・えみょう）高向玄理（たかむろのくろまろ）・新漢人大国（いまきのあやひとだいこく）・学問僧として僧旻（そうみん）・南淵請安（みなみぶちのしょうあん）・志賀漢人慧遠（しがのあやひとえおん）ら 8 人、隋へ留学する。隋使・裴世清が帰国する。（『日本書紀』、『隋書』倭国伝）歓迎の席に馬子や蝦夷がいた記録はない。
609 年	（新羅と任那との外交）	新羅と任那の使いがくる。馬子や蝦夷が歓迎の席に出ているが、厩戸皇子の名前は出て来ない。
610 年	第 4 回遣隋使	（『隋書』煬帝紀）による
614 年～615 年	第 5 回遣隋使	犬上御田鍬（いぬがみのみたすき）・矢田部造（やたべのみやつこ）らを隋に遣わす。百濟使、犬上御田鍬に従って来る。（『日本書紀』）
618 年	隋滅ぶ	唐の時代へ

注記 9. 冠位十二階

徳仁礼信義智を大小に分けて十二階（大徳～小智）、家柄（氏）に関係なく個人に与える。

日本で 603 年に制定され、605 年から 648 年まで行われた冠位である。日本で初めての冠位・位階であり、この制定により有能な人材登用の道が開かれた。朝廷に仕える臣下を 12 の等級に分け、地位を表す冠を授けるものである。七色十三階冠の施行により廃止された。

注 10. 十七条憲法

聖徳太子が制定したと伝えられる日本最初の成文法。和の精神、君臣の道徳を説き、官吏・貴族の守るべき道徳的訓戒を十七か条に記したもの。

一般的な訓戒を述べたもので、当時の朝廷に仕える諸氏族の人々に対して、守るべき態度・行為の規範を示した官人服務規定ともいうべきものである。

7. 推古天皇の謎

① 在位期間

推古天皇 593 年に即位したという通説に対して、当時の天皇（大王）は厩戸皇子で、推古女帝は厩戸皇子の没後の 622～623 年ごろに即位したのではないかとの説もある。その論拠は、日本からの遣隋使（けんずいし）がその大王を男帝とやったこと、当時女帝の際にはなかった伊勢斎王（いせさいおう）に 622 年まで酢香手姫皇女（すかてひめのみこ、用明天皇の皇女、聖徳太子の異母妹）が在任

したことなどである。推古女帝は死の病床で、次の天皇（大王）位をめぐって、田村（たむら）皇子（後の舒明（じょめい）天皇）、山背（やましろ）（聖徳太子の子）両皇子に行動を自重するように遺言したといわれる。陵墓は大阪府南河内（みなみかわち）郡の磯長（しなが）山田陵。

② 600 年の遣隋使を派遣した王・「阿每多利思北孤」とはだれか？

当時、日本は女帝推古天皇の世であったのに、王の名前は「阿每多利思北孤」（通説では北は比の誤りで、アメノタラシヒコ）と男の名前になっている。

このころの天皇崩御年は、記紀では
欽明（571 年）→用明（585 年）→崇峻（592 年）→推古（628 年）となっている。

「伊勢斎王（いせさいおう）に 622 年まで酢香手姫皇女（すかてひめのみこ、用明天皇の皇女、聖徳太子の異母妹）が在任していた。当時女帝の際には斎王は置かなかったの、従い、592 年～622 年は男性天皇で、推古天皇は 622 年以降の可能性もある」との説があるが、初の女帝なので、即位前にそのような決まりごとがあったとは思えないし、斎王を置くかどうかについては自ら決められたはずであり、622 年に変更した可能性もある。その説には大いに疑問がある。

600 年、遣隋使が隋に説明した倭王タシリヒコが男性だったので、当時の天皇は推古天皇ではなく、天皇は厩戸皇子や蘇我馬子だったという説もあるうだが、やはり天皇は推古天皇だ。倭国にも中国にも女帝の前例がないので、対等外交を望む推古天皇は男性王の方が交渉に有利と考え、遣隋使に架空の男性名の王を説明させ、ついでに大国に見せかけるために話を盛ったのだろう。恐らく隋からの使者には蘇我馬子（それとも厩戸皇子が）が倭王として謁見したのだろう。

③ 継承者の争いにまつわる血なまぐさい事件があり、皇后はどの事件にどの程度絡んでいたのか？

穴穂部皇子と宅部皇子の誅殺命令は出している。その他の死に関与していないのか？

広姫の死因は？用明天皇は本当に病死なのか？穴穂部皇子による寵臣三輪逆（みわのさかう）の殺害を防げなかったのか？押坂彦人大兄皇子の死因は？

少なくとも、自身が指名した崇峻天皇を馬子が暗殺した事件に額田部皇女が無関係とするのは不自然である。

つい疑念が湧いてしまう。

- ⑤ 記紀では在位期間の主な事績はほとんど聖徳太子が行ったことになっているが、本当なのか？

推古天皇は聡明であり、キングメーカーであり冷静に決断できるし、また異母弟・穴穂部皇子の誅殺指令を出したように冷酷とも思われる性格を持ち合わせている。そのような推古天皇が「政務の悉くを摂政の厩戸皇子（聖徳太子）に任せた」というのは不自然な話である。

厩戸皇子は即位するに申し分なかったが、推古天皇は自らが即位し、厩戸皇子を皇太子に任命した。そして飛鳥から遠い斑鳩（直線距離でおよそ 14 キロメートル）の地を与えた。厩戸皇子は 601 年には斑鳩宮の造営を開始し、605 年には移り住んでいる。日常的に宮廷に出かけることができない距離であり、厩戸皇子はまるで隠遁生活に入ったようであり、とても摂政は務まらない。

「万機を悉く委ね、摂行させた」というのは記紀の編纂者等の創作と考えても間違いない。

一方、蘇我馬子は日常的に天皇に会うことができる飛鳥に住んでいた。従い、推古天皇の意向を確認しながらだろうが、蘇我馬子が独裁的に政務を行っていたのだろう。蘇我一族を滅ぼした天武天皇や藤原鎌足は蘇我馬子のみならず、蘇我一族の功績を認めるわけにはいけないので、馬子の功績を矮小化した。馬子無くして推古天皇の功績を語ることができないので、推古天皇の事績も目立たなくし、ほとんどの事績を厩戸皇子のものとした。

- ⑥ 長期の在位で譲位しなかった理由は？当時、譲位という慣習（考え）はなかったからだろう。譲位は後世、皇極天皇が初めて行った。そのような考えはなかったと思うが。

- ⑦ 死の最後に後継者を決めなかった理由は？

諸説あるようだが、本当に謎である。

8. 額田部皇女にかかわる疑念を時系列にまとめる

年 度	額田部皇女にかかわる動き	額田部皇女（推古天皇との関係	蘇我氏との血縁関係	疑 念
571 年	欽明天皇崩御	額田部皇女の父親	非蘇我系	
571 年	額 田 部 皇 女、（のちの）敏達天皇と結婚	敏達天皇；夫、異母兄	額 田 部 皇 女（推古天皇）；蘇我稲目の孫	敏達天皇が即位する直前に結婚したと思われる。蘇我氏の強大な権勢欲による？

572 年	敏達天皇即位		敏達天皇；非蘇我系	
575 年	広姫、敏達天皇の皇后となる	広姫；先の皇后、額田部皇女は妃	広姫；非蘇我系	・皇女でない広姫が額田部皇女を差し置いて皇后となった理由が不明。天皇と守屋が新興勢力の蘇我氏の権勢拡大を抑えるために図った？
576 年	・広姫死没 ・額田部皇女、皇后となる			広姫が皇后になってからわずか 1 年ほどで死没し、額田部皇女が皇后になっている。 あわただしい皇后交代劇で、額田部皇女や蘇我氏には都合が良過ぎる。広姫の死因は？
585 年	・敏達天皇崩御 ・用明天皇即位	・用明天皇；同母兄	・用明天皇；稲目の孫	・天皇が仏教禁止令を発した。崇仏家の蘇我馬子が苦境に立ったが、天皇の崩御は蘇我家に都合が良すぎるタイミング？ ・皇后の異母弟・穴穂部皇子は皇后を犯そうとしたが、皇后は三輪逆（みわのさかう）に助けられる。穴穂部皇子が天皇になることを目論んでの仕業とされる。 ・病弱で崇仏派の用明天皇が馬子に推されて即位したが、穴穂部皇子は、大いに不満だったはず？
586 年	・寵臣・三輪逆（みわのさかう）が守屋に殺害される	血縁関係無	非蘇我系	三輪逆の殺害を穴穂部皇子に問われて、守屋は異議を唱えず。額田部皇女も自分の寵臣のはずの三輪逆の殺害を防ぐことができなかったのだろうか？三輪逆が額田部皇女に一方的に好意を示していて、迷惑していたところなので好都合だった？うがち過ぎ？ 何の史料もないが。

587 年	・用明天皇 病没（暗殺説もある） ・穴穂部皇子、馬子に殺害される ・泊瀬部（はつせべ）皇子が即位し、崇峻天皇となる	・用明天皇；推古天皇の同母弟 ・穴穂部皇子；推古天皇の異母弟 ・崇峻天皇；額田部皇女の異母弟、穴穂部皇子の同母弟	・穴穂部皇子；稲目の孫 ・崇峻天皇；稲目の孫	・天皇が仏教信仰の是非を問うたことにより、崇仏派と廃仏派の緊張が高まった微妙な時期での崩御。暗殺の疑いも拭い去れない。 ・穴穂部皇子の同母弟の泊瀬部皇子を見方に入れることにより、皇后側が優位に立つことができた？即位を餌に引き入れたとの疑念が残る。
592 年	・崇峻天皇、馬子に暗殺される ・推古天皇、即位			・多くの皇族や豪族が暗殺に関与したとされる。当然、額田部皇女が暗殺に関与したと疑われてもやむを得ない。 ・推古天皇はある時期（実子の武田皇子が死没し、さらに敏達天皇が崩御したとき？）から女帝になることを望んでいた。即位すると倭国で初の女帝であり、アジア初の女帝である。前例がないので、政権内で女帝を容認せざるを得ない時期が到来するのを待っていたとの見方もできるのでなかろうか？天皇候補の死没により皇族の後継候補も少なくなり、思い通りに即位した？ - 厩戸皇子は19歳であり、厩戸皇子を即位させ、皇太后として君臨する選択肢はなかったのだろうか？謎である。
593 年	・この頃、敏達天皇の第1皇子・押坂人大兄皇子が死没	推古天皇；義母（敏達天皇と広姫の子、）	非蘇我系	・敏達天皇の継嗣候補から外れていた？ ・この後間もなく死没したらしい。暗殺説もある。その場

	したとされる。 ・ 厩戸皇子、摂政になる	・ 厩戸皇子；推古天皇の甥で娘婿		合、推古天皇の関与はなかったか？ いずれにしても生没年が不詳である ・ 厩戸皇子が皇太子になったにしても、「万機を悉く委ね、摂行させた」というのは作り事だろう。 飛鳥の小懇田宮から遠く離れた（直線距離でもおよそ14キロメートルは離れている）斑鳩の地を与え、移り住まわせている。日常的に会うことはできないので、摂政は出来ないはず。むしろ遠ざけられたのではないか？
600 年	遣随使が倭王は男と説明			倭王初の女帝であり、隋にも女性の王はいなかったので、いろいろと考えた末に架空の男の王とした方が外交の交渉に有利と考えただけだと思われる。
622 年	厩戸皇子、死没			謎の死を遂げたとの見方あるようだ
628 年	推古天皇、崩御			この時期、譲位するという慣例は無かったし、皇位に固執したのかもしれないが、37 年の長期にわたり在位した。継嗣を指名しなかったが、その理由は謎である。田村皇子が即位し、舒明天皇となる。（注. 11）
629 年	・ 田村皇子（父親；押坂人皇子、母親；糠手姫皇女（ぬかでひめのひめみこ）が即位し、舒明天皇となる		非蘇我系	馬子の娘・蘇我法提郎媛（そがのほほてのいら、蘇我蝦夷の妹）が田村皇子と既に結婚し、第 1 皇子（古人大兄皇子）を儲けていた。 異母弟の中大兄皇子が 2 歳であった。

	・皇后；宝 皇女（皇極 天皇） ・夫人；蘇 我法提郎媛	・血縁関係 無 ・推古天皇 の叔母	・非蘇我 系 ・馬子の 娘	・中大兄皇子、大海人皇子の 母 ・古人大兄皇子の母
--	---	--------------------------------	----------------------------	-------------------------------------

注記11.舒明天皇

蘇我蝦夷は非蘇我系の田村皇子を皇位につけた。舒明天皇である。これには蝦夷が権勢を振るうための傀儡にしようとしたという説と他の有力豪族との摩擦を避けるために蘇我氏の地を引く山背大兄皇子を回避したという説がある。また近年では、欽明天皇の嫡男である敏達天皇の直系（押坂彦人大兄皇子・田村皇子）と、庶子である用明天皇の直系（厩戸皇子の皇子・山背大兄皇子）による皇位継承争いであり豪族達も両派に割れたために、蝦夷はその状況に対応した現実的な判断をただけであるとする見方もある。

また、「蘇我蝦夷の妹・蘇我法提郎媛（そがのほほてのいらつめ）が田村皇子と結婚し夫人（ぶにん）となり、古人大兄皇子を儲けたこと、厩戸皇子が先に死去したことなどもあり、明確な後継者の指定はされなかったものの、蘇我氏の力を背景に 629 年に舒明天皇として即位した。」という見方もあるようだ。

後の話だが、蘇我入鹿は従兄弟の古人大兄皇子を皇極天皇の次期天皇に付けようとし、山背大兄皇子の一族を滅ぼしたとされる。蝦夷はこれを知り、激怒し嘆いたとされる。

舒明天皇の皇后・宝皇女（宝のひめみこ、後の皇極天皇）は押坂彦人大兄皇子の第 2 皇子・茅渟王（ちぬのおおきみ）の第一皇女。

ともあれ、舒明天皇の時、政治の実権は蘇我蝦夷にあった。（引用）

9. 当時の王位継承者候補

①敏達天皇崩御（585 年）時の王位継承者候補一覧

	父親	母親	仏教	
押坂彦人大兄皇子 （第 1 皇子）	敏達天皇	非蘇我系・広姫 （先の皇女）	？	この時 11 歳の厩戸皇子とほぼ同じか少し上の年齢とされているので、まだ幼過ぎた。
大兄皇子（第 4 皇子）	欽明天皇	蘇我稲目の娘・堅塩媛	崇仏派	585 年、用明天皇として即位するが、587 年崩御。病死とされるが、暗殺説もある
額田部皇女 （皇女）	欽明天皇	堅塩媛	崇仏派	
竹田皇子	敏達天皇	額田部皇女	崇仏派	生没年不詳だが、幼な過ぎた？

穴穂部皇子	欽明天皇	蘇我稲目の娘・小姉君	廃仏派	
泊瀬部皇子 (崇峻天皇)	欽明天皇	小姉君	?	崇峻天皇として即位する。 用明天皇崩御時に、次期天皇を条件に異母姉の推古皇后側に誘いを受け、寝返ったか？史料は無いが。

② 用明天皇崩御（587年）時の王位継承者候補一覧

	父親	母親	仏教	
押坂彦人皇子 (第1皇子)	敏達天皇	非蘇我系・広姫 (先の皇女)	?	候補に挙げたとされるが、即位せず。以降史料に現れず、後に蘇我氏によって暗殺されたとの憶測がある。物部守屋と蘇我馬子の争いで、馬子に味方しなかったのが理由であろう。 しかし、田村皇子が593年に誕生しているので、死没したのはその後のことである。
桜井皇子	欽明天皇	蘇我稲目の娘・堅塩媛	?	丁未の乱（ていびのらん）で物部守屋に味方して戦死したとされるが、詳細不明
額田部皇女 (皇女)	欽明天皇	堅塩媛	崇仏派	
竹田皇子	敏達天皇	額田部皇女	崇仏派	丁未の乱で、守屋に攻撃され死没したとされる。一説には推古天皇穂御後に死没したとされる
穴穂部皇子	欽明天皇	蘇我稲目の娘・小姉君	廃仏派	丁未の乱で、額田部皇女の詔により、馬子に誅殺される
泊瀬部皇子 (崇峻天皇)	欽明天皇	小姉君	?	崇峻天皇として即位する。 用明天皇崩御時に、次期天皇を条件に推古皇后側に寝返ったか？史料は無いが。

③ 崇峻天皇崩御（592年）時の王位継承者候補一覧

	父親	母親	仏教	
--	----	----	----	--

(田村皇子)	押坂彦人大兄皇子	糟手姫皇女 (欽明天皇と伊勢大鹿 兔名子(い せのおおか のうなこ) の皇女		この時点では生まれていない (593年、誕生)が、628年、 推古天皇崩御後に舒明天皇と して即位する
厩戸皇子	用明天皇	穴穂部間人 皇女(欽明 天皇と小姉 君の皇女)	崇仏派	19歳で聡明であり、適任のは ずだが、即位しないで皇太 子・摂政となる。謎である。 推古天皇の強い意志であろ う。
額田部皇女 (皇女)	欽明天皇	堅塩媛	崇仏派	推古天皇として即位する
竹田皇子	敏達天皇	額田部皇女	崇仏派	既に死没している

10. 最後に

推古天皇は厩戸皇子に即位させなかっただけでなく、早々と飛鳥から離れた斑鳩の地を皇子に与えている。そして605年には早々と斑鳩宮に移り住まわせている。皇子はとても政務を執行することは出来なかった。必要に応じて特命的な案件には関与しただろうが、悉く万機を委ね、摂行することは不可能だった。

推古天皇は蘇我馬子をうまく利用しながら、初めて暦日を用い、冠位を制定して憲法を定め、外交政策も一定の成果をあげ、日本史上において画期的な偉業を達成したといえるが、その一方、時には穴穂部皇子の誅殺命令を出したような冷酷さも持ち合わせていたようである。

推古天皇はある時期(敏達天皇が崩御したとき?少なくとも実子の竹田皇子が死没した時)から女帝になることを望んでいた。男社会の政権で女帝が皇位につくことは至難と認識していただろうし、女帝は倭国で初の出来事であり、アジア初の出来事である。前例がないので、政権内で女帝を容認せざるを得ない時期が到来するのを待っていたとの見方もできるのではなかろうか?

夫の敏達天皇崩御の後、次期天皇はすんなりと欽明天皇の皇子・大兄皇子に決まったようで、皇子が即位して用明天皇となった。額田部皇女は皇后として同母兄・大兄皇子を後押した。皇后の発言力も大きかっただろうし、蘇我氏を始め、諸豪族の同意も得られたのであろう。

皇后は用明天皇崩御時には廃仏派の異母弟・穴穂部皇子の即位には同意せず、実子の竹田皇子の即位を願って穴穂部皇子の誅殺命令を出し、馬子等に誅殺さ

せた。穴穂部皇子を推した物部守屋は蘇我馬子との争いに敗れ、射殺された。しかし、竹田皇子がこの争いで守屋に襲われ急死してしまう。

この頃より、皇后は自から即位することを考え、そのための手を打ち始めたのではなかろうか。非蘇我系で敏達天皇の第1皇子・押坂彦人大兄皇子には即位させなかった。押坂彦人大兄皇子が守屋と馬子の争いで、馬子方に馳せ参じなかったことも一つの理由だろう。押坂彦人大兄皇子は推古天皇の即位後しばらくしてから死没したのだろうが、死没の時期が微妙であり、馬子による暗殺説もあるようだ。

皇后は皇太后となり、その詔により蘇我系で皇后の異母弟・泊瀬部皇子を崇峻天皇として即位させる。単なる憶測だが、穴穂部皇子を牽制するために穴穂部皇子の同母弟・泊瀬部皇子を皇后側が即位を餌にして引き入れたというのはうがち過ぎだろうか？

崇峻天皇が馬子等により暗殺されるが、皇太后は同母兄・用明天皇の皇子の厩戸皇子に即位させず、自ら推古天皇として即位した。

天皇候補の死没により皇族の後継候補も少なくなり、思惑通りに即位したというのはうがち過ぎだろうか？

当時、厩戸皇子は19歳であり、蘇我系で崇仏派である厩戸皇子は天皇として申し分なかったが、皇太后は厩戸皇子を即位させなかった。皇太后自らが即位する強い意志があったからだと思われる。即位して推古天皇となり、厩戸皇子を皇太子としたが、飛鳥の宮廷から離れた（直線距離でおよそ14キロメートルある）斑鳩の地に追いやった。まるで隠遁生活を強いるかのようだ。

日常的に宮廷に参上して天皇に伺うことができないし、官人や諸豪族とも会えない距離なので政務を執行できるはずがない。この時代、輿に乗って移動していた。牛車は平安時代以降だ。たまに宮廷に参上するのも苦労したはずだ。

それに全てを任せるくらいなら、初めから天皇に即位させていたはずだ。日本書紀にある『厩戸皇子を皇太子とす。よりて録摂政（まつりごとふさねつかさど）らしむ。万機（よろずのまつりごと）を以て悉（ことごと）くに委（ゆだ）ぬ。』というのは編纂者等の創作だろう。

推古天皇は日本史上初の女帝として37年もの長期にわたり在位し、皇后時代を含め、外交や国内政治に大きな事績を残し、この時代を無難に乗り越えたのだ。

しかし常に暗い陰が付きまとう。天皇が馬子の仕業に関与していないと考えるのは不自然だろうし、独裁者的な蘇我馬子に操られた感がしないわけではない。

政治感覚に優れ、頭脳明晰で、豪族の反感を買わないように、巧みに王権の存続を図ったと言えるだろう。628年、多くの謎を残したまま崩御した。

参考文献；日本書紀

；永井路子著「新・歴史をさがせた女たち」

；ウィキペディア

以上